

ノートルダム清心女大 家政(食品・栄養)

○今田 節子 高尾 悟子

目的 西日本を中心とした聴き取り調査によると、シラモの食習慣が今日まで伝承されていたのは岡山県と山口県の限られた地域であった。しかし、紅藻類が日本周辺の広い海域に自生することを考慮すると、シラモの自生ももっと広い範囲に及ぶものと考えられる。そこで、文献・聴き取り調査の両面からシラモの自生と食習慣の分布を明確にし、その伝承背景を探っていこうとした。

方法 『諸国産物帳集成』・『古事類苑』等からシラモの自生分布を、また、『日本の衣と食』・『日本の食生活全集』を主な資料としてシラモの食習慣を明らかにした。さらに、聴き取り調査結果を合わせ、シラモの食習慣の伝承・変容背景を考察した。

結果 ①シラモの名称は平安時代の『和名類聚抄』や『延喜式』にはみられず、他の紅藻類に比べ、文献上への出現は遅い。②江戸時代に入ると『毛吹草』・『庖厨備用倭名本草』・『本朝食鑑』等に産地・形態・食べ方等が記載され、シラモは人々に認識されていた。③『所国産物帳』によると江戸時代、シラモは西日本の日本海沿岸、瀬戸内沿岸の11ヶ所に自生していた。④しかし食習慣については、仏事の供物や客膳料理として使用される習慣が、岡山県南の備前地方と山口県北浦地方にのみ伝承されており、これは聴き取り調査結果と一致するものであった。⑤すなわち、江戸時代には西日本の広い地域に自生がみられたシラモは、現在ではごく限られた地域の食習慣となってしまった。⑥この変容の背景には、海岸や湾の埋め立て、海水の汚染等による自生地消滅、漁業規模の拡大および漁業の衰退による採藻漁業の減少、嗜好の変化などの要因が関与していると考えられる。